

義経の正室

河越太郎重頼の娘

第一章 河越館の冬

川面も見えないほど辺りすべてを深く包み込んでいた朝霞も馬の外乗りを終えた頃にはすっかり消えていた。足元の土手には霜柱が立っているが、雲ひとつない青空に浮く太陽の光は穏やかでいつもの凍るような寒風は吹いていない。

河越太郎重頼の長女郷子は、体からわずかに湯気を出しながら川の水を飲んでいる三日月の首筋を優しく撫でた。

郷子は、入間川のすぐ畔に建っている河越館の馬房から自分をもっとも気に入っている芦毛を持ち出して、毎朝雨が降らない限り館から新日吉山王権現までぐるりと一周するのを日課にしていた。

郷子は三人の兄と弟に挟まれていたことで男の子がするものならなんでもやった。弓も引いたし、刀の稽古もした。しかし、乗馬はもっとも楽しい日課だった。弓や刀では、兄たちに全く歯が立たなかったが、乗馬では負けな思っていた。

冬の澄んだ空気を透して西から南側にかけて遥か遠く薄墨で書いたような山並みが見える。入間川の上流の正面には真っ白に冠雪した富士が山並みを台座としてひときわ高く、裾を広げた美しい容姿をみせている。一方入間川を越えた東方には、いまは休耕中の田んぼや畑が見え、その先は見渡す限りの赤茶けた平原が広がっている。

冬の川では、カルガモの親の後ろを五～六羽の小さなコガモが一列になって泳いでいる。遠くには、白鷺が浅瀬にそのうす桃色の足で微動もせず立っているのが見える。

郷子は、十六歳になる今日まで河越館で暮らしてきたので、京の都にいる高貴な貴族の姫君を見たことがない。聞くところによると、彼女らは小柄で顔も手も足も華奢で、肌の色はまるで乳のように白く、光輝く黒髪は腰の辺りまでまっすぐに伸びている。小さく透けるような白い顔に切れ長な一重の目、黒い瞳、小さな鼻と口、眉は太く黒々と書いている。衣装は、絹で織られた色彩鮮やかな単衣を何枚も重ねて着ているので、それは華やかである。

まろやかな言葉をおっとりした口調で調子をつけて話すので、耳あたりはいいが東国のものには内容がよく理解できないこともあるという。

郷子は、川面に映る自分の顔を見ながら考える。目は二重で大きく、鼻も口も小さいとはいえない。家内で習字や琴などの手習いをするよりも、外で動き回っているほうが好きなので、どうしても顔も手も足も色は黒くなる。どちら

かという小柄な方であるが華奢であるとは、間違っても言えないだろう。髪は、漆黒ではあるが長く伸ばすとわずらわしいので肩のあたりで切って組み紐で結んでいる。衣装は、動きやすいように明るい模様をついた麻の狩衣に白か紅の切袴を愛用している。

郷子は、向こう岸の浅瀬で黒いくちばしをつんと上げて、白く細い体をまっすぐに伸ばして、うす桃色の脚で身じろぎもせずに貴婦人のように立っている白鷺を見てため息をついた。それから、青黒いむっくりしたカルガモの親子を見ながら、武骨な夫でもいいから、その人の子供をたくさん生んで、夫婦仲良く並んで後ろに子供を引き連れて歩いたらどんなに幸せだろうと思った。一自分は白鷺のような公卿妻にはなれないし、なろうとも思わない、だからカルガモのような武士の嫁になるのだと心につぶやいた。

その時、土手の赤茶けた草むらから、驚くほど多くのすずめやハトやキジなどが羽音を立てて一斉に飛び立って、郷子を驚かした。見ると先ほどの白鷺も大きな翼を優雅に広げて上空を舞っている。

郷子が振り返ると、白い垂絹を下ろした笠をかぶり華やかな藤色の^{うちぎ}桂を着た小柄な女を乗せた鹿毛の馬がこちらに向かって来るのが見えた。女は、しきりに馬を急かせようとしているが、馬はそれに応えられず、もどかしげに首を振るだけである。郷子は、その様子を見て少し腹を立てた。馬は疲れ切っているのだ。無理をすれば、馬は疲労の極限が来たところでばったり倒れて死んでしまうだろう。あの女は馬の扱いを知らないし思いやりもない。

女は馬がようやく川までたどり着くと、もうこれ以上馬を攻めても無駄だと悟ったのだろう、馬から降りると手綱を取って馬を川の浅瀬に導いた。馬は疲れて元気もない様子だったがしばらくするとやっと水を飲み始めた。馬自体は、胸も尻も大きく張った、見事な馬体の鹿毛だった。あるいは名のある駿馬かもしれない。このような高価な馬を持っているあの女は何者だろうか。着ている華やかな桂から鑑みてこの辺りの者でないことは明らかだった。

郷子は、三日月の手綱を引いて、その女の方へゆっくりと歩いて行った。

不審な人物を見かけた場合に、その素性を確認しておくことは、安全保障のうえからも武家屋敷の常識になっている。

郷子が近づいてもその女は笠も上げずに素知らぬ顔をして、振り向こうともしない。砂利を踏む蹄の音は聞こえているはずだ。

「馬が大変疲れているご様子。遠くからいらしたのですか」

郷子は、相手の衣装に合わせて丁寧な口調で言った。

「・・・・・・・・」

「馬が回復するまで、館のほうですこしお休みなされたらいかがでしょうか」

すると女が白い垂絹越しに話しかけてきた。

「あれはどちら様のお館でございますか。普通の武家屋敷とはすこし違うように見受けられるのですが」

郷子は、驚いて垂絹の中をじっと覗き込んだ。この華やかな藤色の桂を着た者の声は、その衣装に相応しい女房のものとは異なり、明らかに若い男の

それだった。よく考えてみれば、このような桂で袴もつけずに女が乗馬することはあり得ないのだ。

「・・・・・・・・」

郷子の純朴な顔に浮かんだ素直な驚きの反応に、その者は郷子が信用するに値すると評価したのだろう、垂絹を上げて顔を見せた。郷子よりずっと若くまだ少年のように見えるが、ひたむきに相手を見つめる、透き通るような深い瞳と真一文字に結んだ口元に知性と意志の強さが感じられる。

「あれは、河越太郎重頼の館です。この辺りは、時々川が氾濫しますので、軒を高くして寝殿造りのようになっていますから、普通の武家屋敷のようには見えないかもしれません」

若者は、しばらく考えていたが、川の上流の真正面に悠然とそびえる富士を見ながら言った。

「この川を遡ると富士の方へ行くのでしょうか。そして下流はどちらに流れているのでしょうか」

「この入間川は、この河越辺りでは南から北へ、海側ではなく奥地の方に向かって流れています。ですから、ここからでは南に見える富士の雪解け水が底流となって、この川に注いでいるように見えるのです。しかし、実際には、この上流を富士に向かって進むと、途中から西に転じて秩父の山の方に向かいます。一方、下流も、この少し先で大きく右に旋回して、南に向かい、その後大きな川と合流して海に注いでいるそうでございます」

「上流の方に富士が見えたのですこし奇妙に感じて訊いたのですが・・・」

若者は、低い声でつぶやくように言った。

「どちらに行かたいのですか」

郷子が訊ねると、若者はその透き通るような深い眼でじっと郷子の目を覗きこんだ。郷子は、その澄んだ瞳の中に絶望的な深い悲しみと同時に人を信じたいという必死の願望を見つけて自分の魂がその瞳の中に吸い込まれるように感じた。

「私の故郷である木曾に帰りたいのです」

「それなら、もうすこし北に進むと私の祖母の故郷、比企の里にでますから、そこら辺りで西に方向を変えあの山並みの右端に向かえば木曾に行けると聞いたことがあります」

郷子は、手を薄墨でなぞったような山並みに沿って右に回し、遙か彼方に霞んで見える山並みの西の端を指差した。

若者は、わずかに頷いた。

—この方は、木曾の方角は十分に知っておられるのだ—

—それでは、何を求めているのだろうか—

女房の着るような華やかな藤色の桂を身に付け、白い垂絹の下がった笠で顔を隠して、疲れきった鹿毛馬に乗ってきた少年のような若者。

そう、まるでどこからか逃げてきたように。そして木曾に戻るといふ。

郷子は、突然彼が求めているものに気がついた。

—この方は、お腹がひどく空いていて食べ物が欲しいに違いない。だが、気位の高さからそれを言い出せないでいるのだ—

「馬が疲れているようですから、すこし館で休まれたらいかがですか」

「いや、ご迷惑をかけるといけませんから」

「もうどのくらい走らせてきたのですか」

「出てから丁度二日目ぐらいになるでしょうか」

—この方も、馬も二日間も食わずに恐ろしいことからひたすら逃げてきたのだ—

その時、いったん飛び立ったあと巣に戻っていたすずめやハトやキジが赤茶けた枯野からまたいっせいに羽音を立てて舞い上がった。

若者越しに彼が来たのと同じ方角から三騎の黒馬に乗った武士が土煙をあげて疾駆してくるのが見えた。

若者は、振り返って彼らを認めると

「こんなに早く来るとは！」

眦を決して彼らをきつと睨みつけ、唇を嚙んだ。

「早くお逃げになって！」

郷子は、思わず大声で叫んでいた。

「いや、ここで見つければもう逃れる術はないでしょう。これ以上あの鹿毛をいじめたくない」

若者は、もう覚悟を決めたのだろう。穏やかだがきっぱりした口調で言った。

—この方は、あの疲れきった鹿毛馬を叱責していたわけではなく、労わっていらしたのだ— 郷子は、胸がつぶれる思いだった。

「それより、これを御台さまのご息女大姫に渡していただけないだろうか。あわてて出立したので、お渡しすることができなかつたのです」

若者は、華やかな藤色の桂の袖から紫の袱紗に包んだ書状を取り出すと郷子の両手をとってその間に滑り込ませた。

「私の許婚に別れを告げたかつたのです。最後のお願いです。かならず大姫に

お届けしていただきたくよろしくお願い申し上げます。」

若者は、そう言い残すと何かを振り切るように決然と後ろを振り返ると、目の前に迫った三騎の黒馬に方に向かってしっかりした足取りで歩を進めていった。三人の武士は、入間川の川岸で馬を降りると、さっと太刀を抜いた。

郷子には、あの三人の武士が若者を捕らえて連れて行こうとしているのではなく、ここで切り殺すつもりなのだということがはっきり判った。

郷子は、河越館の物見櫓で次兄の二郎重時が何かとこちらを覗いているのを見つけて、必死で叫んだ。

「誰か助けて！」

重時が下を向いて屋敷内に怒鳴ると数名の武士が刀を持って走ってきた。

その時には、三人の武士はすでに短い刀を構えた若者を大刀をぶらさげたまま三方から取り囲んで間合いをすこしづつ狭めていた。

河越館の武士たちが、川岸に近づいてくると、三人の武士のなかでもっとも年嵩と見える武士が怒鳴った。

「手出しはご無用。某は鎌倉殿の家臣堀親家の家来藤内光澄と申すもの。御所さまのご命令で木曾義仲の嫡男志水冠者義高の首を頂にまいった」

若者を助けようとしていた河越館の武士たちの動きが凍りついたように止まった。

三人の屈強な武士は、ひらひらする絹の桂を着て、短い刀を構えた少年のような若者を甘く見たに違いない。ひげ面の武士が、大刀を頭の上に振り上げると無造作に打ち下ろした。若者は、体をすばやく左にひねり太刀先を際どくかわすと一歩踏み込んで、短い刀でひげ面の武士の小手を切ろうとした。ひげ面の武士は、小手をかばって無理に体を引いたため、浅瀬の砂利に足をとられて、後ろに尻餅をついた。水しぶきがぱっと上がった。右横で太刀を構えていたやせた背の高い武士が、すばやく若者の前に回りこんで、ひげ面の武士が切られるのを防ぐ。この時点で、三人の武士は、この若者が容易ならざる相手と認めようだった。

郷子は、思わず痺れるほど手を強く握り締めて、心の中で一負けしないで一と声援を送る。

ひげ面の武士が背の高い武士に守られて、ようやく浅瀬から立ち上がると、いままで、二人の若い武士に任せて傍観していた藤内と名乗った武士も加わり、三人が若者を取り囲んでじりじりと慎重に川に向かって追い詰めていく。若者は、三人に囲まれて逃げ場もないまま押されようすこしづつ川の中ほどに下がってゆく。若者の膝まで水に浸かると、藤内と名乗った武士が太刀を上げて打ち込む構えを見せた。若者がそちらを向いて防御の姿勢を見せた瞬間に、反対側からひげ面の武士が袈裟懸けに斬った。若者の華やかな藤色の桂が二つに

裂けてみるみる血に染まっていく。若者が、切られた体を後ろにそらせると背の高い武士が太刀でその胸を刺し貫いた。若者は、太刀を胸に突き立てたまま川の中に仰向けに倒れこんだ。背の高い武士が、太刀を若者の胸から引き抜くと血が吹き上がって、まっ赤に染まった水面が波紋と共に染みのように広がっていく。

藤内と名乗った武士は、水に沈んだ若者の頭を髻を掴んで引き上げるとすばやく首をかき切った。

郷子は、藤内と名乗った武士が若者の頭を右手にぶら下げ川から上がってくるのを見て、ずっと気が遠くなって後ろに倒れ掛かったが、誰かがしっかりと体を支えてくれた。

「武士の娘が、これしきのことで気絶してどうする」

兄の重時が叱咤した。

藤内と名乗った武士が、黒馬の馬上から、重時に向かって指示した。

「あの死骸の処理、良しなに頼む。御所さまのご意志である」

三人の武士は、若者の頭を布に包む事もなく、そのまま手にぶら下げて走り去った。

郷子は、迎えに来た侍女志乃に肩を支えられて、館の自室に戻ると、褥を敷いてもらって半日ほど横たわった。若者が首を切られる様が目の奥に残っていて、繰り返し繰り返し臉上に浮かんで消えた。あの若者は、斬られても一言も発しなかった。絶望的な深い悲しみと孤独に耐える強靱な意志を湛えたあの透き通るような深い瞳。もし生き残っていたら、必ずや名を成す武士になったに違いない。

郷子は、少し気持ちが落ち着いてきたところで、褥に半身を起こしたが、その際袖に何かが入っているのを感じた。手を入れると袱紗に包まれた書状が出てきた。あの若者から両手の中に押し込むようにして手渡されたこの書状のことを、彼が無残に殺された衝撃ですっかり忘れていたのだ。若者の柔らかい手の温もりが蘇った。

郷子は、袱紗から書状を取り出すとそっと広げた。素朴な筆跡で急いで書いたのだろう乱れた字で三行記されていた。

姫さま

御台さまのごてはいですぐに出立しなければなりません。

おわかれは申しません。

かならず生きのびておむかえに参りますから。

郷子は、十六歳になるこの歳まで恋というものをしたことがない。いままで弓や刀や乗馬など男の子と一緒に励んできた。男は、手強い稽古相手であっても恋の対象ではなかった。それに結婚相手は、どうせ父親が豪族間の勢力の権衡を考えて決めるのだ。娘は親の決めた結婚にわがままを言うことは許されない。

しかし、郷子は、自分より年下の若者の死をも覚悟した恋文を読んで、体が熱く燃えるのを感じた。

—私も愛する人と死をも恐れぬ、燃えるような恋をしたい—

あの方は、私を信頼してこの恋文を託したのだ。もし、お渡しできなければあの方の信頼を裏切ることになる。どんなに困難があろうとも私は、この恋文を大姫さまに届けるのだ。郷子は、堅く心に決めた。

その時、重時が部屋を覗いて、郷子が褥に起き上がっているのを認めると部屋の中に入って来た。

「死体は、寺の和尚に念仏を唱えてもらって、木曾の山が見えるよう高台に穴を掘ってねんごろに弔ったよ」

郷子は、書状をさりげなく褥の下に隠した。

—これは、大姫さま以外の誰にも見せるわけにはいかない—

重時は、郷子の前にどかっと胡坐をかくと

「お前、追っ手が来る前にあの者と話をしていたように物見櫓からは見えたが、何か話をしたのか」

「この館はどなたの館か、入間川の上流を遡ると富士のほうに行くのかと」

「それだけか」

「木曾に帰りたいのだと申されました」

「なぜ、あのような女房の着るような衣装を身に着けていたのか話したか」

「それは、申されませんでした」

「その他には」

「いいえ、何も」

郷子は、大姫のことは話さないことに決めた。

重時は、立ち上がりかけたが衝撃的な事件で心に動揺を受けている郷子を慰める気になったのか、また座りなおした。

「あの者は、お前も聞いたとおり木曾義仲の嫡男義高だ。義仲が後白河法皇の二男以仁王の平氏討つべしとの令旨を得て挙兵した折、同じく挙兵した頼朝公と対立して、和解のために嫡男の義高を人質として頼朝公に差し出したのだ。ただ、その時の名目を頼朝公の長女大姫の将来の婿にするということにした」

「その時お二人は何歳だったのですか」

「義高十一歳、大姫六歳だった」

「まあ、そんなに若く……」

「二人はそれを信じた。そしてその時以来二人は何をするにも一緒に寝るとき以外には片時も離れなかったそうだ。それは雛遊びのような純粋な清い交際であつたらしい。とくに大姫の義高に対する思いは、それは一途なもので家族の誰よりも愛していたという。これは、伯父の安達藤九郎盛長殿から聞いたことだ。お前も知っている通り盛長殿は、頼朝公のお側に仕えて、北の方政子さまとも親しい。だから大姫さまのこともよくご存知だ」

「それがなぜあのようなむごい事に……」

「義高を人質に出した後、木曾義仲は倶利伽羅峠で平氏の大群を破って、上洛を果たした。だが、義仲軍は、都で略奪や強姦を繰り返したあげく、それを咎めた後白河法皇を御所に幽閉した。後白河法皇は激怒して頼朝公に義仲征伐を命じる院宣を出された。それで頼朝公は、弟の蒲冠者範頼殿と九郎冠者義経殿をご自分の代理の大將軍として義仲追討のため京に派遣した。父重頼と兄重房が義経軍傘下の侍大將として馳せ参じているのは、知っての通りだ」

「はい、その後どうなったのかはまだ聞いておりませんが……」

「先月、義経軍は、宇治川で義仲軍を一方的に破ったそうだ。義仲は巴御前とともに逃げ延びたが、近江国栗津でついに戦死したという」

郷子は、女ながらも勇猛果敢といわれて名高い巴御前に憧れていたので思わず訊いた。

「それで、巴御前はどうなりましたか」

「巴御前は、行方不明だそうだ」

「義仲さまとご一緒に死ななかつたのですか」

「巴御前は、一緒に死ぬことを望んだが、義仲がそれを許さず、無理に落ち延びさせたいらしい」

自分が巴御前のような情況に置かれたら、愛する人と一緒に死ぬことを望むだろうか、それとも生き残ることを望んだらだろうか……郷子には判らなかつた。

この時、郷子は自分が後に巴御前と同じような悲境に陥るとは、夢想もしていなかつた。

「義仲さまが戦死されたのであれば、もう人質は不要になったのではありませんか……なにも殺さなくてもいいのでは……」

「頼朝公は、平清盛が継母池禅尼の命乞いで自分を助け伊豆の蛭が小島に流したことが、いま平氏の仇になっていることを、清盛の最大の失策と考えておられるのだ。清盛が、あの時、自分を殺していれば、平氏はいまでも都で栄華を誇っていたに違いないとな」

「ご自分を助けた方をそのように……」

「だから、頼朝公は、情というものを極度に嫌われるそうだ。^{まつりごと}政 というものは、道理でするもので、情でするものではないと。それで将来、自分にとって禍根を残す恐れのあるものは、どんな瑣事でも根こそぎ刈り取ってしまわれるつもりなのだ」

「源氏と平氏なら別の氏族ですから判りますが、頼朝さまと義仲さまは、同じ源氏の一族。それでも情をかけてはいけないというのでしょうか」

「義仲一歳の折、父の源義賢が頼朝公の父源義朝と対立して殺されている。保元の乱では、後白河天皇側についた義朝は、崇徳上皇側についた父為義に勝って、父を殺している。ちなみに、讃岐に流されて死んだ崇徳上皇と後白河天皇は兄弟だ。この弱肉強食の時代、血の繋がりなど一片の価値も置かれていないように思われる。まさに末法の世といえるだろう」

「頼朝さまの御命令にも拘らず、義高さまが、ここまで逃げ果せたのは、鎌倉のお館で誰かの援けがあったからではないでしょうか」

郷子は、書状にあった一御台さまのごてはいによりーという上文を思い出した。

「それは、頼朝公の妻政子さまが、娘の大姫が義高に夢中になっているのを不憫にお思いになって、秘かに女装させて逃がしたらしい」

「それで、頼朝さまは、政子さまにはお怒りにならないのですか」

「頼朝公は、蛭が小島に流されていた時、岳父北条時政殿の世話になっていたので、妻の政子さまには頭が上がらないそうだ」

郷子は、いまは源氏の棟梁として鎌倉を根拠地として強大な権力を持つにいたった頼朝が恐妻家であることにやり場のない悲しみをいくらか慰められた。

「兄上、義高さまを埋葬した場所は川のどの辺りでしょうか。話をしたご縁で供養してさしあげたいのですが」

「そうか、すこし顔色もよくなってきたようだし、それでは私が案内しよう」

郷子と重時が、連れ立って部屋からでると、台所の手伝いをしていた侍女の志乃がすぐに寄ってきた。

「どちらにお出かけですか。お夕食は何時ごろ……」

「すぐに戻ってきます。今日は兄弟揃っていただきますから、大部屋に準備しておいてください」

父母と長兄が不在のいま、この河越館は、重時が一族郎党を郷子が家事を仕切っている。

父と長兄は、武蔵国の有力豪族として頼朝に仕え、郎党五百騎を従えて、木曾義仲討伐のための義経軍に加わって京に遠征しているため、いま河越館は留守居役の長老と郎従、下僕、侍女など三十数名が残っているだけで、館内はが

らんとした感じになっている。

母は、一昨年政子さまが産所、比企谷殿で嫡男頼家を出産した際に、乳母に任ぜられて、そのまま鎌倉に滞在している。

重時と郷子は、並んで歩きながら裏門をでて入間川に向かった。

「伯父君から母上のことは何か聞いていますか」

「頼朝公は、政子さまがご懐妊されているとき、安産を祈願して鶴岡八幡宮の境内と参道を大々的に整備されて参拝されるほど嫡男の誕生を望まれていただけに、ことのほかお喜びで、夫妻揃って、頼家さまのいる比企谷殿を何度も訪れ、乳母である母に労いの言葉をかけられているらしい」

郷子は、頼朝公のことが判らなくなった。逃げ出した親族の子供を家来に二日間も執拗に追いかけて情け容赦もなく虐殺する一方で、子煩悩で恐妻家の良人。

二人が、入間川の畔の小高くなった土手まで来ると、重時は掘り返して間もないこんもりした土饅頭とその前に何段か石を重ねた場所を黙って指し示した。

郷子は、小さな塚の前で腰をかがめて目を閉じると頭を垂れて両手を合わせた。

郷子は、あの若者の絶望的な深い悲しみを湛えた瞳と人を信じたいと必死に願う眼差しを思い浮かべた。あの若者は、わずか十一歳で人質として、父のもとから鎌倉に送られてきた。父に、人質になるように告げられた時、どのように感じたのだろうか。まるで、捨てられたように感じたのではないだろうか。捨てられただけではない。まさかの場合には、殺されるかもしれないのだ。その絶望感は計り知れないものだろう。ただ、かすかな望みは、頼朝公が父義仲のいここにあたるという血筋と、大姫の許婚という人質の名目だけだったに違いない。

幸い大姫は無邪気そのもので、許婚である義高を心から慕ってくれた。いつか殺されるかもしれないという強迫観念とかすかな希望という際どい均衡の下で暮らした一年間。そして、ついに入間川の畔で惨殺された。その直前、あの若者が最後に必死の思いで頼ったのは私だったに違いない。

なぜ、あの時、すぐに匿ってやらなかったのだろうか。涙が目から溢れ出して、土饅頭の端にぼたぼたと落ちたが、郷子は、手で拭わなかった。頭のない体だけの死体は、成仏できないのではないだろうか。

郷子は、頼朝公は、父の主君でもあり、この武蔵国を含む東国武士団の希望の星であったが、これだけは一許せないと思った。

そして、褥の下に隠してきたあの書状をなんとかしてでも大姫に届けようと心に決めた。そして、その機会は思いもかけない意外な形で到来するのだが、当然ながらこの時郷子はまだ知らなかった。

二人が館に戻ると、大広間にはもう夕餉の支度が整っていて、兄の三郎重員と弟の四郎重方、それと妹の綾姫が用意された黒塗りの高杯の前で所在なげに欠伸などしている。

「腹が減ってもう少しで餓死するところだったぞ」

重員が、広間に入ってくる二人を見て不満を言う。

「この寒いのに、二人揃ってお外で内緒話ですか」

綾姫が、口をとがらせる。

弟の重方は、無口でいつもの通り何も言わない。

重時と郷子が黙って自分の高杯の前に座ると、侍女の志乃が給仕して皆は食事を始めた。しばらくして郷子は、綾姫に訊いた。

「綾姫、今年の正月でそなたは幾つになった」

「九歳ですよ。そんなことはご承知のくせに」

「ほう、もうそんなに大きくなったか、それではきっと好きな人がいるのであろうな」

「もう婿様を決めています。お姉さまのように行かず後家にはなりとうありませんから」

郷子は、驚いた。

「まあ、憎らしいことを……それは誰です」

「内緒です」

「俺は知っているぞ」

重員が、にやにや笑いながら言う。

「嘘ばかり」

「いいや知っているぞ。小太郎兄さんであろう。少し前まで、お前はいつも

『小太郎兄さんのお嫁さんになるんだ』と騒いでいたからな」

「馬鹿にして……私はもう子供じゃありませんよ」

綾姫の大人びた言葉に、兄弟みんなが笑った。

綾姫は膨れ面をしている。

郷子は、大姫のことを思った。義高が人質に入ったときが七歳であれば、今年の正月でまだ八歳。綾姫より一歳も若い。一人の若者を全霊を込めて一途に愛したが、その相手が別れの言葉もなく去ってしまった。八歳の姫の悲嘆はいかばかりのものであろうか。

夕餉を終える頃、長老の九兵衛がすばやく入ってきて、重時のまえに腰をかがめると訊いた。

「先ほど、京にいる重頼さまから近況を知らせる早馬が到着し、皆様にご報告すべく待機しておりますが、いかがいたしましょうか」

「そうか、兄弟皆で聞きたいのでこの席に呼んでくれまいか。九兵衛殿もご一緒してください」

九兵衛はいったん下がると、すぐに藤吉という農民からの若い志願兵を連れて戻ってきた。藤吉は、乗馬がうまいのと話を要領よく的確に伝えることができるので重宝されて、京と河越との間の連絡係として利用されている。

藤吉は、板の間に正座すると懐から書状を取り出して重時に渡す。

「重頼さまから皆様へのお言付けを預かってまいりました」

「そうか、遠路はるばるご苦労であった」

重時は、兄弟を代表して労をねぎらうと、書状を広げた。

いつもの通り無事を知らせる簡単な便りだった。

重時は皆に聞こえるように、読み始めた。

「わしも重房も達者でいるから案じるな。

宇治川で志田義広を破り、京に入るとすでに義仲は逃げ出した後であった。

すぐに義経殿と一緒に六条殿に馳せ参じ後白河法皇を幽閉から解放して差し上げたところ、感謝のお言葉を頂いた。

法皇も義経殿が大変気に入られたようだ。

ところで、都は、飢饉で食べるものもまともにならないし、東国よりも格段と寒い。それで、義仲軍は庶民から食べ物や衣服を強奪したという。だから義仲軍の評判はすこぶる悪い。

われわれは、鎌倉殿のご指示で衣服や食料を余分に携帯していったので、衣食に困ることはない。また、鎌倉殿のご命令で軍の規律を厳しく守り、庶民に食料の一部を分け与えたら大変に感謝された。

義経殿の評判は上々じゃ。

法皇の宣旨をうけ、鎌倉殿のご命令で近く平家を追討することになった。

まだ当分の間帰国できそうにない。詳しくは藤吉に聞いてくれ。

重時、父が留守の間はお前が主人だから兄弟をまとめて家をしっかり守れ。

河越は、入間川の恵みで、飢饉がないことだけでも恵まれた土地ぞ。

農民を大切にし、馬を肥やせ。

重頼

重時は、書状を折りたたむと脇に置いて、藤吉に訊いた。

「それで、平家の討伐はどうなったのだ。なにか聞いておるか」

「私が、ここに来る途中鎌倉の比企谷殿にいる北の方にお館様からの書状を差し上げていましたところ、鎌倉殿に早馬が入ったということを知り、その命令を見つけて話を聞くことが出来ました」

「それは重畳」

「平家は、福原に城を築き、噂によると十万の大軍を集めたそうです。福原は、前に海を後に険しい山を背負った要塞堅固なお城だそうでございます。攻める源氏は、大手の大將軍に範頼さまの五万騎、搦手の大將軍に義経さまの一万騎、都合六万騎です。お館さまと重房さまはいつも通り義経さまの軍にいるものと思われます」

「まあ、源氏のほうが四万も少ないのでは負けてしまうわ」

綾姫が、驚いて口をはさむ。

籐吉が、にっこり笑って言う。

「それが、源氏が勝ったのでございます」

「ええ、それはどうして」

綾姫が、無邪気に興味を持つが、全員が同じ思いで籐吉を見つめる。

「平家軍と源氏軍が一の谷の木戸口でお互いに睨みあって小競り合いをしている最中に、義経さまが三千騎の精鋭を引きつれ、一の谷の北方鶴越に向かいました。鶴越は、切り立った絶壁で人が通れるところではありません。それで、平家軍は、北方はもっとも安全な場所として、まったく油断しておりました。

そこに、義経軍が馬で絶壁を駆け下りてきたものですから、平家軍は一斉に浮き足立って、我先に船に乗って海に逃げたそうでございます」

「それじゃ、義経さまが、たった三千騎で、十万の平家軍を破ったということなの。義経さまってすごい……」

綾姫は、単純に感嘆の声を上げる。みんなも多かれ少なかれ同じ気持ちである。

「この話が、京の人に伝わると、寄ると触ると義経さまの話で持ち切りだそうです。京の人は、もともと平家が嫌いだからなおさら気持ちがすっとするのでしょう。それと英雄が好きなのですよ」

「そんなに人気があるのですか」

重員が、興味津々に訊く。

「義経さまが京に帰って、馬で都大路を行くと家々から公家も一般大衆も、大人も子供も、男も女も一目見ようと我先に出てきて、義経さまを十重二十重に取り囲むので、先に進むこともできないそうです。義経さまは、おお得意でそういった観衆に手を振って応えているということです。そして、酒を飲んでは、兄者のためなら死んでもいいと思って鶴越を落ちたのじゃ。義経をすこしは見直したでござろう、ほめてくださいと大声で叫んでいるらしいです」

「鎌倉殿も、そんな弟をもってさぞかし誇らしいことだろう」

重時が言うと、

「それが、そうでもないらしいのです。軍奉行の梶原景時殿が、将たるもの

は、兵の後ろにいて戦全体を把握して状況に応じて兵を動かす総指揮官でなければならない。将自ら先陣となって敵に突っ込むのは、無謀なだけであって総指揮官としては、落第であると鎌倉殿にご報告して、鎌倉殿もその通りだと言われたとか」

「だって、戦だから勝てばいいのでしょうか」

綾姫が、憤慨している。

「頼朝さまは、義経さまを総指揮官として評価していないのではなく、むしろ義経さまの身を案じて、無謀な行為を心配しておられるのよ」

これは、郷子の、そうあって欲しいとの願望である。

それには答えず、藤吉がはたと手で膝を打った。

「そうだ忘れるところでした。鎌倉で北の方さまから、郷子さまにお言付を預かってまいりました」

「なんでございましょう」

郷子は、家事の細々した注意に違いないと考えた。

「梅の花が咲く頃に、比企尼が、お里帰りなされるが、その際、郷子と話をすることをご希望されているとのことでした」

「お祖母さまが、私に……」

「あぁいいな、お姉さまだけ御呼ばれして、私もお山一杯に咲く梅の花を見たいのに」

綾姫が、口をとがらしている。

「お祖母さまは、頼朝公の乳母をされていた方じゃ、なにか含みがあるのではあろう」

重時が、考え深そうにそういうと話はそれでお終りになった。